

総選挙で政治の大転換を

衆議院選挙公開討論会行なわれる

8月30日の投票日めざして、総選挙のたたかいがスタートしました。日本共産党は、小選挙区に鈴鹿市出身の中野たけしさんを予定候補として、また政党選択となる比例代表で「建設的な野党」としての日本共産党の支持を訴えて、がんばります。

7月24日、鈴鹿市民会館で「2009年衆議院選挙公開討論会」が行なわれ、立候補予定の4氏が勢ぞろいして政策を中心とした討論が繰り広げられました。

日本共産党の中野たけし氏は「国民の暮らしと権利を守るルールを社会の土台に」「大企業に雇用を守る社会的責任を果たさせる」「弱者にいちばん重い消費税を福祉の財源にするのは間違い」と主張しました。

自民党の鈴木英敬氏は「古い政治から新しい政治へ」「世代交代」を強調しましたが、これ



まで悪政を自民党が進めてきたことへの言及はなし。民主党の中川正春氏は自民党から飛び出して日本新党、新進党と渡り歩いた経歴を述べ「2大政党による政権交代」を強調しました。子ども手当や最低保障年金などを打ち出しましたが、その財源として消費税を言いながら、それは「次の選挙の争点に」先送りする姿勢です。宗教団体から出る「幸福実現党」の萩都志子氏は、「北朝鮮へ先制攻撃すべき、自衛隊を強化」「日本の人口を3億人にする」などと、聞いて驚くような「政策」を語りました。

図書館が文化行政の中心にある町

7月13～15日、文教福祉委員会で先進地視察に出かけましたが、そのうちの東京都府中市、群馬県前橋市には立派な図書館がありました。立派というのは、中央図書館だけでなく全市に地区館を配置した「図書館サービス網」があるということです。



府中市は各地区に12の地区館があり、中央館と1日2回の連絡便でネットワークを作っています。何よりも図書購入予算が年1億円という豊富さには驚きました。

前橋市は、一昨年「子ども図書館」を町の中心に設置しました。（写真は子ども図書館の中）中央館と子ども図書館、そして11の地区館をもち、

半径3キロの円内にかならず図書館がある、というサービス網を築いています。こちらも図書購入予算は9千万円ほどあります。

鈴鹿市はなにが足りないのか？カネ？やる気？

両市を視察したわが鈴鹿市の議員一同は、「ハー」とため息をつき「なぜこんなに違うんや？」。わずか3千万円だった図書購入予算を1千万円もバツサリ切った鈴鹿市。広い市域に地区館が一つも無いのに、移動図書館を廃止した鈴鹿市。図書館を見れば、その町の文化水準が分かりますと言われますが、もともと低いレベルをさらに引き下げてしまったお粗末な文化行政を反省し、せめて世間並みに引き上げる努力をすべきです。

議員の「費用弁償」見直しの論議

今年の「議会改革特別委員会」では、検討する項目の第1に「費用弁償」の見直しをあげ、議論をすすめています。「費用弁償」とは、議会の会議に出席すると、今は1日3000円の「日当」が出るようになっています。これを各議員の「通勤費用」（自宅～市役所）実費に改めようではないか、市民の常識に合わせた議員活動にしていこうということです。

第2回「一日派遣村」を開きました

6月に続いて7月8日に第2回「一日派遣村・何でも相談会」を、神戸コミュニティセンターで行ないました。今回も開始と同時に相談者が訪れ、夕方までに10人の相談がありました。依然として「派遣切り」がすすんでいること、雇用保険が切れるなど、生活に行き詰まった人が多く出ていることが分かりました。

ホームレス状態の人も2人、ひとは車上生活、ひとは神戸公園で寝ていたとのこと。アパートに入る保証人がいなくて困っている人も多くなっています。生活保護の窓口にも3人同時に申請に行き、私がまとめて世話を焼きましたが、こんなことは長年の議員活動の中でも初めてのことです。市の担当者はきちんと対応していただき、全員見通しがつきました。

共産党の事務所が現代の「駆け込み寺」に

行先のない人は、共産党の事務所を仮の住まいにして、各種手続きやアパート探しをしてもらいますが、3月ごろから入れ替わり立ち代わり「住人」がいる状態で、まさに現代の「駆け込み寺」となっています。「衣食足りて礼節を知る」と言いますが、それよりも「住まい」の方が大事だ、人間の生活の基本は「家」だと痛感します。

たまたま相談会のビラを見て来た人は何とか救援できましたが、他にも多くの困窮する人々がいると思うと、気が晴れません。

30年前の国府小「南北戦争」の記録

国府町にお住まいの林勝生さんという方から、「校舎建設協力委員会議事録」という記録集が送られてきました。内容を見ると昭和51年、国府小学校の全面改築工事をめぐって、地域の声も聞かずに一方的に建設を進めようとした市教委に、計画変更をせまり実現させた一大住民運動の詳細な記録でした。「4階建ての校舎を南側、運動場をその北側」とする市教委案を撤回させ、「運動場を南側、校舎を北側」との住民案に変えさせて、現在の国府小は建てられたのです。着工前の全面変更は、画期的なことでした。

記録の中に、当時の辻井市議が問題の解決方向を示した「すずか民報」も入っていて、30年前も共産党が住民と共に頑張っていたことが分かります。

ずいそう



夏休み子ども科学電話相談

NHKラジオで、毎年夏休みになると「子ども科学電話相談」という番組を放送している。小学生以下の子どもの素朴な疑問、ハッとするような鋭い質問が次々に出されて、各分野の最高レベルの専門家が、子どもになんとか分かってもらおうと悪戦苦闘しながら答える様子が、とても面白い。運転しながら聞いていて、しばらく車を止めて聞き入るほどの珍問・珍回答もあり、夏の朝のささやかな楽しみである。

「人間はなぜ死ぬのですか？」という単刀直入な質問に、回答者はまず「君の大事な人が亡くなったの？」「お爺ちゃんがこの間死んだの」「そうか、さみしいねえ」などとやりとりをしてから、科学的な回答に入る。「走っている電車の中でジャンプしても、同じ所に落ちるのはなぜ？」との質問に、「君は電車の中でジャンプしてみて、発見したんだ」と、質問そのものをよく気がついたとたたえ、それから科学的に説明する。塾などへ通うより、この放送を毎日聴いていたほうが、ずっと科学好き、勉強好きな子どもになるのでは思う。

政治家も「そもそも」の疑問に正直に答えるべき

科学者がこのように、ハイレベルな科学を子どもにも分かるように懸命に工夫している姿勢を、政治家は見習うべきである。特に日本の政治家の話は、大人が聞いてもサッパリ分からない。こんどの総選挙には、各党の政策を子ども向けの「マニフェスト」にするよう義務づけてはどうか。また例えば、こんな質問にどう答えるか、答えられなければ「失格」とする。

「福祉の財源は消費税しかない」と言うが、消費税のなかった20年前にはどこから福祉のお金を出していたの？

「企業献金は将来なくします」と言うが、今すぐ「もらいませぬ」と言えばいいではないか？

「雇用を増やす」と言うが、いちばん首切り・派遣切りをしている大企業に、なぜ「やめろ」と言わないのか？

「税金のムダ使いをやめろ」とか「国会議員を減らす」とか言うが、税金100%の「政党助成金」をなぜ返上しないのか？